1935（昭和10）年7月1日　『家の光』7月号

発行部数百万部突破する（その2）

～編集後記でも百万部突破を喜ぶとともに第二の首途（かどで）と意気込む～

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

1935（昭和10）年の『家の光』7月号は遂に発行部数が百万部を突破した。前回は、当時の編集部長有元英夫の「百萬部發行の悦びを迎へて」という記事をみて、『家の光』の発行を企画し、日本一の発行部数になるまで成長させ、かつさらに発展させようとする彼の姿勢を確認した。

今回は、7月号の「編輯後記」で語られている百万部突破の喜びとその後の『家の光』の在り方をみていく。そしてさらに、その後の展開を追うが、戦時体制のもとでさまざまな苦悩を強いられる。

編集後記からみる、発行部数百万部突破 その後の展望

『家の光』が創刊されてからまる十年の年月が過ぎ、その間に百二十三冊の『家の光』が發行された。

丁度この七月号において多年口に唱へながら、よそからは無謀な望みと思はれてゐた百萬部發行の喜びをかち得たのである。

我々は讀者とともに『我らの家の光』が日本一の發行部数をかち得たことを喜ぶと共に、これぞわが産業組合運動進展の将来を語るバロメーターとして譬へやうのない心強さを感ずる。

百萬部以上の部数を續けて發行した記録のない日本のジャーナリズムの潮流に、わが五百四十萬の産業組合員は、新しい歴史を書いたのだ。それは統制のとれた協同が如何に絶大な結果を生むかといふことの、そして小さなも

のも集まれば、如何に世間を驚かす大きなものになるかといふ實證（じっしょう）である。

さは云へ『家の光』はまだ若い。雑誌としてはまだ完成しきつてゐない。外國の名のある雑誌が五十年百年の歴史をもちつづけて二百萬三百萬の讀者をかち得てゐる苦心と光栄を聞く時、我々の前途は遥かに遠い。

我々は皆様に代わつて光榮あるこの雑誌を預かるものとして、今後新時代の空氣をとりこみつゝ新奇に走らず舊きにこだはらず、日本精神を編輯の柱として中庸穏健な道を歩み、創刊以来めざした、爲になる雑誌、面白い雑誌、安い雑誌の三大目標に向かつてますます努力をつゞけたいと思ふ。名實ともに日本一の雑誌となすべき抱負を以て第二の首途（かどで）をするものである。

以上が「編輯後記」の全文であるが、百万部突破を喜ぶとともにそれ以上に二百万三百万の読者を持つ外国の名のある雑誌を目標にさらに頑張るという意気込みが伝わってくる。その意気込みが「名實ともに日本一の雑誌となすべき抱負を以て第二の首途（かどで）をするものである」という結語になったとみるべきであろう。

百万部達成後の時代潮流とその影響

1935（昭和10）年7月号で百万部を達成した後も部数は順調に推移し、産業組合拡充五か年計画の最終年度である1937（昭和12）年12月号は一二六万九千部に達し、計画にはなかった都市版一五万三千部を加えると、実に一四二万二千部という大量部数に達した。

そして1938（昭和13）年から始まる第二次産業組合拡充三か年計画において、『家の光』関係では、「組合員大衆教育ニ関スル事項」のなかで活動方針が指示されていた。

すなわち、「産業組合教育部（昭和十二年から設置）ハ常時家の光ノ普及宣伝ニ努メ、ソノ社会教育的家庭読本タルノ任務ヲ完ウセンガタメ、組合員オヨビ大衆教育ノ教材、生活充実ノ資材トシテ活用シ、モツテ組合精神ノ涵養ト大衆文化ノ向上ニ資スルコト」とあり、そのために「家の光大会、部落単位ノ家の光読書会、家の光実用記事講習会、家の光研究会ノ事業ヲ行フ」となっていた。『家の光』普及にかける当時の関係者（計画立案者、普及担当者）の熱い想いが伝わってくる。

そしてこの基本方針に沿って、1937（昭和12）年5月に、「全国道府県支会教育主任者協議会」で、二〇〇万部普及三か年計画を諮り、翌1938（昭和13）年1月から発足することになっていた。

しかし、1937（昭和12）年7月7日に、北京郊外の盧溝橋に鳴り響いた一発の銃声がわが国を戦争へと導く。日華事変に拡大し、1938（昭和13）年4月には国家総動員法が公布され、同年6月「物資総動員に関する声明」が出された。この声明で32品目の物資に対する使用制限が発表され、このなかに、パルプ、紙が含まれていた。この情勢のなかで「二〇〇万部普及計画」は、事実上不可能になり、中断せざるを得なかった。

戦争が進展してくると、用紙の制限がますます加わるとともに、検閲の内容も厳しくなり、指導が命令になっていく。かつては1部270ページあったものが1941（昭和16）年にはその半分の130ページ程度にならざるを得なかった。ただ、1943（昭和18）年頃から「良書については特配しても良い」ということになり、食糧増産等に果たす『家の光』の役割が当局から認められ、1942（昭和17）年12月号が144万、1944（昭和19）年1月号が153万5千部（ただし1部64ページ）という最高記録を出した。

しかし、1945（昭和20）年になると本土空襲が本格化する中で、紙の手配から印刷の交渉、輸送の心配、インキの手配など困難に直面した。それでも発行を懸命に継続したが、戦時版第二号（六・七月合併号）をもって、終戦を迎えることとなった。

当時の家の光関係者へ思いを馳せる

『家の光六十年史』に次のような記述がある。「雑誌の総ページ数も二七〇ページ台となり、今や市販の大部数の雑誌に比べて見劣りするものではなかった。しかも定価は二〇銭で、もし戦争の暗い影がささず、用紙の制限がなければ、二〇〇万部はおろか、三〇〇万部も夢ではなかった。事実、第二次産業組合拡充三か年計画発足時の十三年一月には、普及部数は一三三万二〇〇〇部になっていた」。百万部を突破した後も、順調に部数を伸ばしていた状況からして、当時の家の光関係者の多くがこのように感じていたのではないだろうか。併せて、用紙の制限、検閲の強化の中で『家の光』発行に従事した関係者のひたむきさを忘れないようにしたい。

＜参考文献＞

『家の光』（昭和10年7月号）
『家の光六十年史』（昭和61年3月）